石川達三
作品集
20

充たされた生活

石川達三

新潮社版

充たされた生活
石川達三作品集第二十巻
昭和四十八年三月二十五日発行
昭和五十年五月十日二刷
定価 九五〇円
著者 石川達三
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話業務部〇三(266)五一一一
編集部〇三(266)五四一一
振替東京四—八〇八番
印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社
装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1973 Tokyo
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

充たされた生活　5
金環蝕　181
解題　久保田正文　459

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

充たされた生活

充たされた生活

1

二月二日——

昨夜、吉岡は帰らなかった。一昨日の夜も帰らなかった。

こういう立場に置かれた女は、仕事が手につかなくなり、火鉢のそばに坐って、じっと動かずに凝固しているものではないかと思う。私は自分がそうなることに抵抗する。朝から洗濯をして掃除をして、自分の服にアイロンをかけ、靴をみがき、せい一杯に動きまわる。それは帰って来ない男のことを忘れるためであったらしい。虚しい努力だ。私は自分にむかって、忘れたような顔をして見せる。自分をごま化そうとする。しかしどんな事をして見たって、忘れられるものではない。

私は彼に、何の期待をももってはいない。期待しないのは、私の正当防衛だ。しかし私は不安定で、いらいらして居る。彼がなぜ帰って来ないのか、大抵の見当はつく。私は嫉妬する気はない。嫉妬という感情は男女関係を悪化させるだけで、決してプラスには作用しない。昔の女にとっては嫉妬が美徳の一つであったかも知れないが、今では悪徳のうちの一つだ。男女平等の社会では、嫉妬という感情は意味がうすれて来たらしい。

彼の気持が私からはなれたのと、私の気持が冷たくなったのと、どちらが先だったか、私には解らない。だから、二人の関係がだめになって来たのも、どっちの責任ともはっきりしない。もしかしたら私が悪かったかも知れない。私はだまされたとも、捨てられたとも、裏切られたとも思ってはいない。女が純粋に受身であったならば、そういう言い分も成り立つだろうが、私だって或る時期にはもっと積極的であった。だめになって来たのは、要するに二人の罪だ。

私は吉岡に何の期待をももたないと言いながら、やはり吉岡を待っている。いやな気持だ。もしかしたら私のいら立たしさは、彼を待っている為ではなくて、男という生活の足場を失った、自分の不安定さから来たものかも知れない。舟の底に穴があいて、水がはいって来たような気持だ。習慣だけで、私は彼を待っている。本能かも知れない。帰って来たら嫌なことが一杯おこるにきまっている。自分のあさましい姿を私は見たくない。

午後一時半、私は街に出る。アパートの扉に鍵をかけて、その鍵を事務所にあずけ、いそぎ足で街に出る。街

に、何の目的もない。ただ、私たちの部屋に居たくなかったのだ。もうそろそろ吉岡が帰って来そうな気がしたから、彼と顔をあわせないためだった。彼に何の期待ももってはいないが、やはり彼は存在している。男と別れるということは、容易なものではないらしい。街に出てゆくことに、私は抵抗を感じていた。文字通り、(うしろ髪を引かれる)気持があった。彼が帰ってくれれば、私は彼の魅力に負けてしまいそうな気がする。その魅力の正体は、四年にわたる同棲生活で、私にはすっかりわかっている。わかって居るくせに、やはり負けそうになる。負けたい気持が私にあるからだ。私が街に出たのは、彼から逃げることでもあった。あの男の魅力があの男のわざわいの元でもある。私だけではなく、多分どんな女も、彼を(独占)することは出来ないだろう。

風がつめたくて、歩道は凍っていた。そのつめたさが、快適だった。私の心の内も外も、みんな冬だった。ほんの時おり、粉雪がちらちらと降った。粉雪のやんだあとは、風ばかりだった。私は石黒先生をたずねて見ようかと思っていた。中途半端な気持だった。たずねてみて、居なければ居なくてもいい。ぜひ会いたいとまでは思っていなかった。身上相談というものは、馬鹿な女のすることだ。石黒さんは私を軽蔑するだろう。それがわかっていたから、私は余計なまわり道をする。問い詰められたら返事に困るようなものが、私の気持のなかにたくさん残っていた。私はまだはっきりと、離婚の決心をきめた訳ではなかった。何遍も決心はしたけれども、その直後にまたあと戻りするのだった。今度もあともどりするかも知れない。あるいは、決心がきまらないままで別れてしまうのかも知れない。

風に吹かれながら、私はショウ・ウインドウをのぞいて歩く。無駄な時間つぶし。うちへ帰ろうにも帰れない女がひとり、街をさまようて居るのだ。どうせいつかはアパートへ帰るだろう。そのときどんな事になるか、私は知らない。この街を支配しているのは、男たちだ。男の作った社会が、がっしりとした構造をもって、私の周囲を支配している。男の気に入った女だけが、この世界では幅を利かしている。男の許可がなければ、女の生活はみじめになる。そのことに女は気がついていない。男は何喰わぬ顔をして、女を油断させておく。だから、大部分のショウ・ウインドウは女のために飾られてある。男たちの、上手な策略だ。その策略が、今日はしきりに眼につく。私は意地わるになって居たらしい。他国の街を歩いているような、そらぞらしい気持で、ひややかな眼つきで、私はウインドウをのぞいて歩く。手袋、花、ハ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ンカチ、オルゴールのついた宝石函。私はその手に乗らない。

一杯のコーヒー。隣の席で若い娘が男と話をしている。たのしそうな、無駄な会話。無駄な会話がつづいているうちに、女は身売りの約束をしてしまうのだ。

ほんとかい？

ええ、本当よ。全然ひどいの。わたし逃げ出したいわ。

逃げ出してどこへ行くんだ。

どこへでも行くわ。生活を新しくするの。

新しくするって、どうするんだ。

どうすればいいかしら。教えて……。あなたの言う通りにするわ。

私は腹立たしくなる。どうして若い女たちはこんなにも男が好きなのか。独身の女の不安定さが私には痛いほどよくわかる。私もかつては吉岡に対して、あんな風だったかも知れない。私もあんな風にして、自分で身売りしたのかも知れない。自己嫌悪。

私はコーヒーの上に象牙色をした生クリームを浮べる。クリームの上に昼のシャンデリヤが輝く。私は充たされない。どこかに穴があいたような空虚を感ずる。コーヒーの苦さが、苦すぎる。けれども私は負けはしない。夫婦関係、あるいは男女関係が、まずくなった場合、なにもそれが悲劇である必要はない。まずくなったものは、処置をつければいいのだ。私と吉岡との関係は、もう永続きはしないだろう。私はやはり石黒さんのところへ行って見ることにした。

街の十字路のわきに大きな穴があいている。穴の中の階段を降りて、私は地下鉄に乗る。

地下鉄のなかで、乗客は不思議にじっとしている。いま地面の下をくぐっているのだというかすかな恐怖が彼等を静かにさせているのかも知れない。自分勝手に地上に出ることは出来ない。その意味では留置場とおなじだ。自由も人権も停止されている。目的の駅についたとき、その人だけは、釈放されたような楽な姿勢になって、明るい足音をたてて、地上への階段をあがってゆく。他の乗客は、まだ留置場に残されている不安な気持で、からだを凝固させている。文明というものは非常識で、むちゃくちゃだ。水の底をくぐり、空を飛び、地下をもぐる。一つ一つがみな命にかかわることだ。そんな事までしなくてはならないほど、人間社会はせっぱ詰っている。私はそのことに、かすかな疲労を感ずる。

地下鉄のなかで制服の大学生がひとり、吊革につかまったままじっと私を見ていた。青年の新鮮な好奇心が私

の皮膚を刺戟する。わるい気持ではない。私はわざと眼をつぶって、ほしいままに彼の好奇心を満足させてやる。私のどこがこの学生の気に入ったのだろうか。こういう年下の青年を魅惑するようなものが私のどこかに有るのだろうか。私の赤っ毛。私の肌の白さ。服装の色の調和。私は濃緑にチェックのはいったオーヴァー。くすんだオレンジ色のマフラで頭を包み、緑の靴をはいている。手袋はすこし赤すぎて、調和が良いとは思えないが、今は買える身の上でない。青年は眼をはなさずに私を見ている。まちがってはいけない、私は既婚者だ。既婚者だから魅力があるのか。そんな魅力を知っているとすれば、油断のならない青年だ。油断がならないということは、女にとっては、それだけ楽しいという事でもある。見られている気持の軽い緊張。無責任な緊張。ゆきずりの、こんな年下の青年にさえも、こうした無駄な緊張を感ずるというのは、下品なことだろうか。下品であるにしても、すこしばかり楽しい。

学生は五尺九寸もありそうだ。外套が短かすぎる。背丈が伸びすぎたのだろう。黒い革の手袋。表情に苦味があって、東京の子ではない。地方から出てきた青年の土臭さがある。その土臭さがいかにも新鮮だ。私は吉岡を思い出す。吉岡が最初のころ私を魅惑した何とも言えない新鮮さを思い出す。しかしあの新鮮さは結局、彼のわがままの或るときの変貌にすぎなかったのではないだろうか。青年の顎の横に茶色のほくろが一つ。あのほくろを覚えておこう。未知の運命とたわむれる気持。誰にも知られない、ひとり切りのたわむれ。それが少しばかり私の気持を明るくしてくれた。

電車通りの、三等郵便局の横の電柱に、小さな看板を私は見つける。なつかしい看板だ。白地に黒で、ただ〈白鳥座〉と書いて、下に矢じるし。裏も表も同じだ。矢じるしは露路の奥に向いている。一年九カ月ぶりに私は露路にはいって行く。ずっと前、夜更けて、星空を仰ぎながら、稽古のつづきの台詞をつぶやきながら、五、六人の仲間といっしょにこの露路を出て、みんな空腹で、すぐに近処のそば屋にはいり込んだりしたものだった。二年も三年もまえのことだった。

あの頃の仲間はいま、ラジオやテレビに出たり、映画に出たり、もちろん年二回の公演にも出て、いっぱしの俳優になってしまった。脱落したのは私と星野さんだ。早川、小杉、藤岡、紺野、宇田、細井。みんな良い人たちだった。気障で、青臭くて、感傷的で、慾がなくて、

どんな遊びよりも芝居の好きな連中だった。

「おい、朝倉ちゃん、じゅん子ちゃん、本当に劇団をやめるのかい。馬鹿だなあ。家庭にはいるのはかまわないけどさ、どうして芝居をやめる気になったんだい。芝居より面白いことなんか、世の中に有りゃしないよ。それゃ君、一時の迷いじゃないのかい。……まあいいさ。芝居やりたくなったら、また戻っておいでね」

私が白鳥座をやめるとき、宇田さんがそう言った。私は涙が出た。忘れられない言葉だ。彼はいまでも貧乏で、一人の子供のお父さんだというのに、いまだに芝居をやっている。死ぬまで芝居をやって行く人だ。

稽古場の建物は、要するにバラックだ。田舎の小学校のような、ペンキ塗りの安普請で、ペンキの色ももう古い。玄関の扉を押すと、昔の雰囲気がそのままそこにあった。寒くて、ほこりっぽくて、乱雑で、芝居のためにすべてを捧げてしまったあとのようだった。

私の勘は当った。やっぱり石黒先生は来ていた。来月の末に定期公演があるので、その稽古だった。地声が大きくて、無遠慮に大きな声を出すから、どこに居てもすぐわかる。台本を持って、ストーヴのそばのこわれかかった椅子に坐って、立稽古の演技をつけている最中だった。私はオーヴァーを着たままではいって行った。

「おやおや、何だ、幽霊かい」と石黒さんは言った。

「まさか昼間っから、幽霊じゃあるまいな。足は有るかい。何しに来た。また芝居をさせて下さいなんて言ったって、そうは行かねえよ。不景気な顔をしてるじゃないか。誰に用があるんだい」

「先生に用があるんです」

「俺はだめだよ。御覧の通り、いそがしいんだからね。お前なんかと遊んでる暇はねえよ」

こんにちはでもなければ久しぶりでもない。いきなり機関銃のようにまくし立ててくる。その荒っぽい言葉が、芝居者の口調だった。乱暴な叩きつけるような言葉のなかに、なぜか不思議なあたたかみがある。それがこの人の人柄だった。何と言われたって私はおどろきはしない。

「稽古がすむまで待っています」

「一時間かかるよ」

「かまいません。どうぞお続けになって……」

「何のはなしだ。吉岡のことか。吉岡のことなら俺は知らねえよ」

「先生のお顔を見たくなったんです」

「うそをつけ。……まあいいや。その辺で待って居な」

石黒さんは真黒な丸首のスエーターを着て、パイプをくわえている。粋な姿。すこしばかりやくざっぽくて、

それが彼には似合っていた。肩幅があって、背丈はかなり高いのだけれど、全体にどすんと重い感じで、エネルギッシュで、だから浮気もするんだろうけれど、不潔な感じはどこにもない。頭なんか丸坊主にちかいような坊っちゃん刈りで、ヘヤトニックも油も要らないから、世話がなくていいだろうと思う。この人とも永いおつきあいだ。亡くなった兄貴のクラスメートだったから、もう十年にもなる。多分兄貴と同年だから、亥歳の三十七か。いかにもイノシシらしい。迷いというものを知らないのではないかと思う。自分のしていることを、あれくらい信ずることが出来たら仕合せだ。あの人には自殺なんかできないだろう。もしかしたらそれは、芝居をやる人たちに共通な性格であるかも知れない。芝居をやる人に、迷いは禁物だ。名優の名演技というものは、迷いがないからやれるのだ。

稽古場の一番すみに坐って、私はみんなの立稽古を見る。みんな巧くなった。昔の仲間も後輩も、みんな巧くなった。すこし悪達者になったのではないかとさえ思う。テレビや映画に出ることが多くなって、演技が要領よくなったらしい。つまり（売れる演技）を覚えたのだ。そこからマンネリズムがはじまる、と言っては生意気だろうか。

見ていると、私も芝居をしたくなる。私ならあそこはこうやりたい、と思う。演技の方法は無数にある。文章を書くのに、どんな風にでも書けると同じように、演技もまたどんな風にでもやれる。しかしその中に、自分の人柄に合った演技というものがある。人柄に合わない演技は、どんなに苦心しても、その役の味が出ない。配役のむつかしさはそこにある。私にはイプセンのノラはやれてもオフェリヤの役は出来ないだろう。それだけの幅は無い。

なぜ芝居が面白いのか。心理学者はいろんなことを言うだろう。演技本能だとか何だとか。学問的なことはわからないが、自分の人生からはなれて、ちょっとの間だけでも、他人の人生を経験するということは面白い。しかも、芝居が終れば、また元の自分の人生に帰れるのだから、そこが有難い。怒りも悲しみも恋も死も、それを自分で経験しながら、同時に客観している。こんな豊富な人生はほかには無い。観客は、俳優の演技で泣かされて、泣いたことを楽しみながら帰って行く。俳優は幕がおりると再び自分の人生に立ちかえって、自分を新鮮に感じながら、いそいそと自分の生活にもどって行く。うまく出来ている。芝居を終ったあとの爽快な気持というものは、一種特別なものだ。だから宇田さんが言ったよ

うに、（芝居より面白いことなんか、世の中に有りゃしないよ）という感想が出てくる。私はまた稽古をして見たい気がしてきた。

立稽古が終り、明日の打ち合せをすませて、石黒さんはオーヴァーを着る。

「お待ちどおさん。今から一時間ひまがある。それ以上はつきあえないが、いいかい。珈琲でも御馳走しようか」

「珈琲はさっき飲みました」

「ひとりでかい」

「そうです」

「ふむ、この寒空に、街に出て、若い女がひとりきりで珈琲を飲んだとすれば、あまり仕合せじゃないらしいな」

石黒さんの言葉は生きがよくて、勘が早くて、ぴんぴんひびいて来るようで、爽快な気がする。

「お察しの通りです。身上相談に来たんです。先生に軽蔑されることはわかっていますけど……」

「いやだな。俺はそんな相談には乗らないよ。そんな義理は無いからな。女の身上相談なんて、聞かなくても大抵はわかってるよ。聞きたくないね。馬鹿野郎……」

私はちっとも腹が立たない。言いたいだけの悪態をつきながら、ちゃんと話を聞いてくれる人なのだ。それから助言を与えたり指示をあたえたり、文句をならべながら、どんな世話でもしてくれる。兄貴の生きていた頃からそういう人だった。私は石黒さんに罵倒されながら、何となく心が充ちてくる。ひとりきりでウインドウをのぞいて歩いていたさっきと比べて、空虚だった心があたたかく充たされてくる。吉岡にはこういうものが無い。彼の魅力は、何かしら胡魔化されたような不安を私の心に残す。

喫茶店の二階の片隅で、私は石黒さんと向いあって坐る。少女が注文を聞きに来る。

「お前はアイスクリームだろう」と先生は言った。

憎らしい人だ。先まわりして、何でも解ってしまう人だ。私はすこしがっかりする。

「ねえ先生、別れようと思うの」

「そんな事だろうと思った。駄目だよ。俺は不賛成だよ。どんな事情があったか知らねえが、事情なんてたいていい似たり寄ったりなもんだ。聞いても聞かなくても同じだよ。亭主が二、三日帰って来ないとか、生活費をくれないとか、性格が合わないとか、ぶんなぐられたとか、その程度のはなしだ。自分の悪かったことは棚に上げて亭主の悪口ばかり並べ立てたら、どんな夫婦だって三月と

は持たねえよ。お前なんか何も特別に取り柄があるわけじゃなし、少々美人だぐらいの事で己惚れていたって、そんな事じゃ亭主は満足しませんよ。何日かえって来なかったんだ」

「ふた晩よ」

「うむ。そんな事だろう。それですぐに別れる気になったり、俺のところへ身上相談に来たり、そんな量見だから亭主は帰って来ねえんだ。駄目だよ。別れちゃいけないよ。どこまでも亭主の首にぶら下って居な。この世で一番大事なものは亭主だけだと信じて、ぶら下って居な。どんな男だって、女房の眼で見れば文句があるもんだ。吉岡が特別に悪いわけじゃあるまい。あれくらいのところは、まあまあ一番あたり前な亭主だ。それで我慢ができないのは、じゅん子の我儘だ。お帰り。かえりに牛肉でも買って行って、酒の五合も買って、二人ですき焼きでもして、うまい晩飯をたべて見な。また仕合せがやって来るよ。夫婦なんてそんなもんだ。吉岡と別れたりしたら、俺はもうお前とつきあわねえぞ。いいか。馬鹿野郎」

「先生は知りもしないで、私ばかり悪いみたいに言うのね」

「ああ、それで沢山だよ。夫婦喧嘩なんてものは、女房の方を叱っておけばたいていかたが付くもんだ。俺がじゅん子の味方をしたら、別れ話に賛成しなくちゃならんだろう。それで本当に別れたりしたら、あとが面倒だからな」

「どうして面倒なの？」

「別れたあとの、お前の身のふり方をつけてやらなくちゃならないじゃないか。独りでぶらぶらしている訳にも行くまいし、飯の心配からしなきゃならんだろう、ほんとにさ。別れる別れるって偉そうなことを言って、別れたらどうやって暮して行くんだい。貯金なんか、百も有りゃしないだろう」

石黒さんは私の告白を、ひとことも聞こうとはしなかった。それは彼の悧巧さかも知れない。面倒な事件に深入りしたくなかったのだろう。しかし結果は逆になったようにも思われる。石黒さんに洗いざらい聞いてもらう事ができれば、私はそのことに心の安らぎをとり戻して、あの人が言ったように、牛肉と酒とを買って帰ったかも知れない。何も聞いてもらえなかった為に、私の不満は内攻して、吉岡と別れる決心を一層つよくしてしまったような気もするのだ。しかし石黒さんが、(別れたりしたら、おれはもうお前とつき合わんぞ)と言った、その言葉のきびしさが、いつまでも冷たく心にひびいていて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com